極東勤労者大会について

——日本問題を中心にして——

辻　野　功

一

いわゆる極東民族大会は、正式には極東勤労者大会（The Congress of the Toilers of the Far East）、あるいは極東の共産主義的・革命的組織の第一回大会（The First Congress of the Communist and Revolutionary Organisations of the Far East）と言う。この二つの名称のうち、いずれか一つが正式なものであると、断定することはできない。なぜなら、大会の発言には、両者が等しく使われているからである。もちろん、大会議長ジノヴィエフは、「同志諸君、私は、共産主義インターナショナル執行委員会を代表して、極東勤労者大会の開会を宣言します」と述べ、大会議事録のタイトルも「第一回極東勤労者大会」となっており、極東勤労者大会が正式名称のように思えるが、しかし大会宣言は、「極東諸人民に対する極東の共産主義的・革命的組織の第一回大会の宣言」となっており、さらにドイツ語版の大会報告書のタイトルは「極東の共産主義的・革命的組織の第一回大会」（Der Erste Kongress der kommunistischen und revolutionären Organisationen des Fernen Ostens）となっているのである。以下、本稿においては、便宜上極東勤労者大会を使うことにするが、この極東勤労者大会がなぜ極東民族大会と一般に呼ばれるようになったかは、明らかではない。しかし大会参加者の一人渡辺春男氏が、「元来この会議の目的は、ワシントン会議の帝国主義的再分割政策の策謀に対抗すること、とくに帝国主義ブルジョアジーの極東再分割に対抗して革命的労働者と被圧迫民族の抗議的示威運動を示すこ

と、これを契機に極東における共産党の結成とそれの影響下の革命的諸勢力の糾合をはかること――等々であった。これがまた、当時シベリアにあった日本軍の撤退をはやめるという直接的な目的をもっていたことも、もちろんである。

ところが、混乱した情勢のなかをきりぬけて実際に集まった顔ぶれをみると、共産主義者とその同調者だけでなく、それ以外のひろい社会主義者・アナキスト・サンジカリストから民族主義者・民主主義者まで色彩もさまざまだった。このため主催者がわは、最初の予定より範囲をひろげて、これを極東諸民族の大会としてもようがえした。この大会が公的には極東勤労者大会といわれながら、一般に極東民族大会と呼称されるのは、これにもとづくのである[1]」と述べているのは、この間の事情をある程度明らかにするものであろう。

極東勤労者大会は、コミンテルン執行委員会の決定に基づいて開かれることになったのであるが、コミンテルンは、第二回大会で「民族・植民地問題テーゼ」を採択した後、一九二〇年九月、バクーで東方民族大会を開いた。この東方民族大会は、トルコ二三五名、ペルシァ一九二名、アルメニア一五七名、ジョルジア一〇〇名、ほかに多数の中国人、インド人など合計三七民族、一、八九一名が参加して開かれ、コミンテルン第二回大会の「民族・植民地テーゼ」支持を表明し、回教徒民族の独立やレーニン主義的な反帝国主義闘争の方針などをまとめた決議などを採択し、さらに二〇民族四七名からなる評議会をつくり、機関紙『東方民族』(The Peoples of the East) の発刊を決議した。

このようにコミンテルンは徐々にその目を東方に転じていたのであるが、そのコミンテルンが極東勤労者大会の開催を決定したのは、この東方民族大会の直後であった。しかしすぐに計画が、具体化された訳ではなかった。極東勤労者大会の開催を具体的日程にのぼらせたのは、ワシントン会議開催の報道であった。一九二一年八月、コミンテルン執行委員会は「来るべきワシントン会議に関するテーゼ」を採択し、さらに一一月ワシントン会議と同時期に[2]、極東勤労者

大会をイルクーツクで開くことを決定した。

しかし極東勤労者大会は、予定どおりには開かれなかった。その間の事情を、山極晃氏は、「大会は十一月にイルクーツクで開かれる予定であったが、ヴォイチンスキーによると、遠方で実施が容易でなかったことと、中国共産党など二、三の組織から帝国主義の仮面をよりよく暴露する材料を得るために、ワシントン会議終了まで待つ方がよいという意見も出たという。そして結局翌年一月にモスクワで開催することに変更された。開会日の延期の第一の理由は準備が間にあわなかったことにあると思われるが、場所の変更の理由ははっきりしない。カー（Carr, E. H.）は、ワシントン会議でその民主的性格と独立性を主張していた極東共和国にとって、その領域内でこのような大会が開かれることは、その立場を弱めると考えられたのかもしれないと推測している」[3]と分析しているが、この分析はおそらく正しいであろう。もっとも渡辺春男氏が、「この大会は、情勢の変化と準備の都合及び老人（片山潜のこと……辻野）の入露がおくれたことなどのため、同年十一月開催の予定を翌年一月まで延期され、場所もイルクーツクからモスコーに変更」[4]されたと述べて、片山潜の入露のおくれが開催予定の変更の一因となったとしているのについては、筆者は未だ肯定も否定もできない。予定変更の理由はともかくとして、極東勤労者大会はイルクーツクでは予備会議が開かれただけで、その予備会議終了後、各代表はモスクワに赴き、他の代表たちと合流して、一九二二年一月二一日の開会式に臨んだのである。

二

極東勤労者大会に参加した代表の数は、次のごとくであった。

決議権を有する代表		審議権のみを有する代表	
一、朝鮮	五二	一、インド	二

二、中国　三七
三、日本　一三
四、モンゴル　一四
五、ブリヤート　八
六、ジャワ諸島　一
七、カルムーク　二
二、日本　三
三、ヤクート　三
四、ブリヤート、ソヴィエト・ロシア社会主義共和国連邦および極東共和国　四
五、中国　五

決議権は以上の代表の他に、東洋労働者共産主義大学の二名の代表（中国人学生）と在モスクワ朝鮮人学生二名にも与えられたので、決議権を有する代表は合計一三一名になる。これに審議権のみを有する代表一七名を加えたもの、すなわち一四八名が極東勤労者大会の正式参加者であった。

彼らが共産主義者ばかりでなかったことは、すでに渡辺春男氏の引用文で触れたところであるが、それを党派別一覧表にして示すと次のようになる。

党派	共産党	青年共産同盟	社会主義青年同盟	無政府共産主義政党	民族主義政党	無党派	計
朝鮮	37	5				6	48
中国	14		11			14	39
日本	9			4		3	16
モンゴル ブリヤート	1	1	1		10	3	16
計	61	6	12	4	10	26	119

ところで日本代表団のメンバーであるが、アメリカからの田口運蔵、野中誠之、二階堂梅吉、間庭末吉、鈴木茂三郎、渡辺春男の六名についてはともかくとして、日本からの代表が誰と誰であったかは問題である。

それを当時の関係者の回想記、自伝から作成した一覧表で示せば、次のごとくである。

	渡辺春男『片山潜と共に』	近藤栄蔵『コミンテルンの密使』	徳田球一『獄中十八年』	荒畑寒村『寒村自伝』	鈴木茂三郎『ある社会主義者の半生』
高瀬清	○	○	○	○	○
徳田球一	○		○	○	○
吉田一	○	○	○	○	○
和田軌一郎	○	○	○	○	○
小林進次郎	○	○ 註 小林某としている。		○ 註 小林進としている。	○ 註 小林進次としている。
北村英以智	○				○ 註 北村某としている。
伊藤某	○		註 「二人が記憶としていた」		
高尾平兵衛		○	註 「二人が思うにも一人にも他にもようきりしない」		
水沼熊		○	註 「二名の出版印刷労働者がいた」	○	
北浦千太郎		○	註 「他にもはっきりしている。	○	

当時の関係者の証言が、このようにくいちがっているので、日本からの代表者の氏名を確定するのは困難であるが、ここでは一応大会参加者（渡辺、徳田、鈴木）のうち、最も詳しい叙述をしている渡辺春男氏に従いたい。念のためつけ加えれば、極東勤労者大会を研究している小山弘健氏、山極晃氏も渡辺氏の叙述に従っている。なお審議権のみを有

する三名の代表が誰であったかは、そのうちの一名が大庭柯公であったこと以外は、いまもって不明である。

日本代表団のメンバーは以上述べたとおりであるが、田口ら在米の日本人社会主義者が極東勤労者大会に派遣されるにいたった経緯は、次のごとくである。ワシントン会議に対抗して極東勤労者大会開催を決議したコミンテルンは、当時メキシコにあった片山潜に、この大会の発起者・組織者としてただちに入露することと、アメリカ在住の日本人社会主義者から代表を派遣することを指令してきた。片山はアジアにおけるもっとも古い社会主義者として、さらに第二インターナショナルから第三インターナショナルへ転換してきた数少ない世界的な社会主義者の一人として、極東勤労者大会で指導的役割を演ずることが期待されたのである。アメリカ在住の日本人社会主義者の中からは、メキシコにいる片山の選考によって、渡辺春男、間庭末吉、鈴木茂三郎、野中誠之、二階堂梅吉の五名が代表に選ばれた。そして片山から正金銀行の加納久朗の手を経て、旅費一、〇〇〇ドルが送られてきた。さらに片山からは、トロツキー、コロンタイ女史宛の紹介状なども送られてきた。代表団の信任状は、アメリカ共産党から交付され、一九二一年九月下旬には、西部の野中、二階堂もニューヨークに到着した。間庭は旅券がないため、黒海のオデッサ行きの貨物船にコック助手として乗り込み、一足先に出発し、野中も単独で渡欧することになり、渡辺、鈴木、二階堂の三人だけが一緒に当時世界最大の豪華船オリンピック号に乗り込み、ヨーロッパへ向かった。一行は先発した野中とベルリンで落ち合った後、モスクワへ着き、宿舎のリユックスホテルにはいった。そこには先着の間庭が待っていた。彼らがモスクワへ着いて一カ月程後の一二月中旬、片山潜がモスクワに着いた。片山潜の名は日露戦争中の第二インターナショナル・アムステルダム大会でのプレハーノフとの握手以来、ロシア人の間には有名であって、彼は国賓としてモスクワ入りした。彼がモスクワの駅に着いた時は、病床にあるレーニンを除けば、ソヴィエト政府、共産党、コミンテルンの要人はすべて彼を迎えに出、その後は彼の肖像入りのバッジやブロマイドが、国中で売り出され、さらには「セン・カタヤマ工場」と名乗

る工場さえ出現したほどである。コミンテルン第三回大会出席のため、渡辺らより半年程前にアメリカから入露していた田口運蔵は、その頃、日本からやってくる同志との連絡やその他の特殊な任務のために、イルクーツクに派遣されてモスクワを留守にしていたが、ともかくアメリカからやってきた日本の社会主義者は、全員無事ロシア入りしたのである。

一方コミンテルンは、本国の日本にも、当然働きかけていた。一九二一年九月頃、コミンテルン第三回大会に田口と共に出席していた中国の共産主義者張太雷が、極東ビューローのヴォイチンスキーの意をうけて、留学生を装って来日し、堺利彦、山川均らと個々に会って、極東勤労者大会へ一〇人程の代表団を派遣して欲しい旨を要請してきた。堺、山川は代表団派遣に不賛成ではなかったが、その年五月に上海へ密に渡った近藤栄蔵が帰途下関で、自らの不注意のために料理屋で芸者を揚げて遊興していたところを逮捕され、さらに留置場内でおとりのスパイにのせられ、組織が徹底的に調査された直後のこととて、あまり積極的な熱意を示さなかった。そこで結局人選は近藤栄蔵、吉原太郎[5]、高尾平兵衛らの手で進められ、「ボル派」から暁民会の高瀬清、山川の水曜会からという名目で徳田球一、「アナ派」からは吉田一と高尾平兵衛、おなじ傾向の和田軌一郎、その他に小林進次郎、北村英以智、伊藤某の三名の印刷工、合計八名が選ばれた。ただし高尾は、途中上海から帰国したので、日本からの代表は結局前述した七名となった。

日本からの代表団の中にアナーキストが加わった経緯については、「その当時の労働運動陣営内で、警戒の網をくぐって海外へ潜行する勇気と訓練をもつ労働者は、大概アナルコ・サンジカリストだった。張の意見では、それでも差支ない、あちらへ行けばどうせボルシェヴィキに転向するからと言うことだった。[6]そこでなるべく勇敢な者を選ん[7]」だという近藤の叙述は、おそらく正鵠を射ているだろう。それはともかくとして、代表団は、徳田が一〇月上旬張太雷と共に、他の連中は一〇月下旬に、それぞれ上海に渡り、そこから南京―済南―天津のコースを経て満州へ入り、満州里から国境を越えてチタへ向かい、さらにイルクーツクに着き、そこで田口運蔵に迎えられたのである。

三

極東勤労者大会は、一九二二年一月二一日のモスクワでの開会総会から、二月二日のペテログラードでの閉会総会まで、一二回の総会を開いた。[8] 大会の概要を知るために、議事日程を次に示そう。

開会総会　一九二二・一・二一　議長ジノヴィエフ

ジノヴィエフの開会演説

大会運営委員会（プレシディウム）の選挙

演　説

片山潜（共産主義インターナショナル）

カリーニン（全ロシア労農評議会中央執行委員会）

ロゾフスキー（赤色労働組合インターナショナル）

ヨオヅ（日本代表団）

タオ（中国代表団）

パク・キョン（朝鮮代表団）

王（婦人代表団）

モンゴルの代表

シンプソン（ジャワ代表団）

シラー（青年共産主義インターナショナル）

ロイ（インド）

カー　（アメリカ）

第二会議　一・二三昼　議長サファロフ

資格審査委員会の選挙

議題と議事規則の提案と採決

ジノヴィエフによる報告「国際情勢とワシントン会議の結果」

第三会議　一・二三夜　議長サファロフ

リ・キョン「中国情勢に関する報告」

ウォン・キェン・ティ「中国労働者の状態に関する報告」

第四会議　一・二四昼　議長サファロフ

ピング・トング「中国の経済情勢に関する報告」

タオ「中国の政治情勢に関する報告」

第五会議　一・二四夜　議長パク・キョン

王　「中国の婦人の地位に関する報告」

ウォン・キェン「ワシントン会議とそれの朝鮮に対する関係についての報告」

パク・キョン「朝鮮の革命運動に関する報告」

第六会議　一・二五昼　議長シュミアツキー

ディン・ディブ「モンゴルの過去と現在の状態に関する報告」

クォー　「朝鮮における経済、労働者および農民の状態に関する報告」

片山　「日本の政治・経済問題に関する報告」
ヤキワ　「日本共産党の組織と政策に関する報告」
加藤　「労働者組織『労働者』に関する報告」
第七会議　一・二五夜　議長サファロフ
ジノヴィエフ報告に関する討論
演説者、ヨドシュ、片山、フローラ、タオ、キム・クフー
ボーヤン・マヌフ
討論に対するジノヴィエフの回答
ディヤン　「宣言等に関する動議」
第八会議　一・二六昼　議長ディン・ディブ
サファロフ「民族・植民地問題とそれに対する共産主義者の態度に関する報告」
第九会議　一・二七昼　議長王
サファロフ報告に関する討論
演説者、ディン・ディブ、コークワン、クオング、キム・チョウ
タオ、コー、コロコフ、ウ・アン、長野（永野？）
ヤコヴァ、加藤
第一〇会議　一・二七夜　議長チャン・ゴ・タオ
サファロフの報告に関する討論に対する彼の回答

・ザンド・ベイ「資格審査委員会の報告」

第一一会議　一・三〇夜　議長シュミアツキー

演　説

カー（フランス共産党）

ヴァルター（ドイツ共産党）

ジノヴィエフとサファロフの報告に関する決議草案の討論

演説者、サン、片山、コー・シル・モン、ディン・ディブ

ジノヴィエフ報告に関する決議「ワシントン会議の結果と極東の情勢」採択

サファロフ報告に関して張より提案された決議の採択

第一二会議　二・二　議長ジノヴィエフ

演　説

スミルノフ（ロシア共産党ペテログラード委員会）

エフドキモフ（ペテログラード労働組合評議会）

ナウモフ（ペテログラード管区及びバルチック艦隊革命軍事評議会）

ニコラエヴァ（ペテログラード婦人労働者）

ラング・ツァー・シン

片山

王

クヘム
タン・ザム
リ
カー（フランス共産党）
カー（アメリカ共産党）
サファロフによる「極東諸人民に対する極東の共産主義的・革命的組織の第一回大会の宣言」の朗読
ジノヴィエフの閉会演説

以上、議事日程を一瞥しただけでも、極東勤労者大会は、ジノヴィエフ報告→それを受けとめた上での各国からの報告と討論→サファロフ報告→討論→決議という形で、展開されたことが分かる。そこでこの線に沿いながら、日本問題がどのように検討されたかを見てみよう。ジノヴィエフは開会演説で、「我々は日本のような国で何が起こっているか、ほとんど知らない」[9]としながらも、その報告「国際情勢とワシントン会議の結果」において「朝鮮は日本との関係において、たとえばイギリスに関してのアイルランドの役割を演じている」[10]、「マルクスはかつて、イギリスにおける革命なしには、いかなるヨーロッパの革命もコップの中の嵐にすぎない、と言った。そうだ、必要な修正を加えれば、日本の革命についても同じ事が言える。日本の革命なしには、極東におけるいかなる革命も比較的重要でない地方的な事件にすぎないだろう。日本ブルジョアジーは、極東の何百万もの人びとを支配し抑圧しており、その手中に世界のその地域の運命を握っている。日本ブルジョアジーの敗北と日本における革命の究極的勝利こそ、極東問題を真に解決しうる唯一のものである。日本における革命の勝利の後でのみ、極東の革命は、コップの中の嵐ではなくなるのだ」[11]、したがっ

て「日本労働運動の運命は、巨大な国際的重要性を獲得しつつある」[12]と述べて、極東における唯一の先進資本主義国日本における革命こそが、全極東の民族的・階級的解放の前提条件であるとした。

ジノヴィエフは、日本のプロレタリアートの歴史的・客観的役割をこのように規定したのであるが、それでは彼は日本のプロレタリアートの主体的条件について、どのような認識を持っていたのであろうか。彼は、極東勤労者大会が「日本の労働者と親しく会合した最初の機会である」[13]ので、「我々の情報はまだ完全からほど遠い」[14]としつつも、「その国の階級意識をもった共産主義者はわずか数百人しか数えられることができない。革命家、サンジカリスト、アナーキストの数もまた、わずか数百にしかなら」[15]ず、「多くの点において日本の労働運動は、まだ小児病の段階を通過しているにすぎない」[16]とした。「階級意識をもった共産主義者」が数百名もいたというのは、誇大な現状認識であるが、それでも後に見る日本代表の報告よりは現実に近かったと言うべきであろう。それはともかくとして、ここから出てくる結論は、日本のプロレタリアートはその劣弱な主体的条件を量的にも質的にも飛躍的に強化し、そしてその運動を、極東の被抑圧民族の運動と結合させて、その歴史的任務を果さねばならないということであった。

それでは、ジノヴィエフ報告を受けとめた上での日本代表の報告はどのようなものであったろうか。まず片山[17]の報告であるが、彼は各種の統計を引用しつつ、日本の政治・経済情勢を冷静に客観的に分析した。問題は、片山の次に立ったヤキワ（yakiwa）[18]の「日本共産党の組織と政策に関する報告」である。ヤキワは「私は、日本共産党がどのように結成され、現在その地位はいかなるものであるかを諸君に語りたい」[19]と報告を始めているのであるが、彼はここで日本共産党かすでに結成されたこととして報告している。それでは、その「日本共産党」とは一体何を指すのであろうか。彼は、この点に関して、在米日本人社会主義者が、「共産党結成という重要な使命を帯びた一同志を日本に派遣した。その同志は近藤で、彼は今留置場にいる。彼は神戸へ行き、そこで活動を開始した。そして一九二一年四月、彼と他の

同志の活動の結果、共産党が出発した[20]」と述べている。近藤栄蔵の名前および一九二一年四月という時期から考えて、ヤキワが報告した「日本共産党」は、明らかに近藤栄蔵を上海に派遣するに際して格好をつけるためにつくった「コミンテルン日本支部準備会」のことである。この「コミンテルン日本支部準備会」を「日本共産党」と称するのも問題であるが、その組織状況を「現在共産党（たった二〇七名）の四〇％は労働者で、一五％は知識人（学生）であり……彼らは皆んな未熟で、抑圧され、さらに厳しい検閲があるけれども、合法・非合法のパンフレットを出し、町々や大都市に細胞をつくった[21]」として、小なりと言えども共産党の中核はすでに形成されている、と報告したことである。ちなみに一九二三年の段階でも、共産党の党員数は官憲押収文書によれば五八名であり、「たった二〇〇名」という数字自体が誇大報告の最たるものであって、このような誇大報告をいったんすれば、爾後の報告はその延長線上でしか行なわれなくなり、それを受けとるコミンテルンの判断を誤らせたのである。もっともコミンテルンへの「日本共産党」結成報告はヤキワのものが最初ではなく、コミンテルン第三回大会に出席した吉原太郎が「同志諸君、私は今、日本で結成された共産党の革命的挨拶を諸君に送る。私はやっと二三日前に党の決議と規約と宣言を受取った[22]」と述べ、タケグチ（田口運蔵）も「先月日本共産党は、宣伝・煽動のための強固な土台をうちたてた[23]」と述べているのであって、ヤキワは吉原・田口の報告にそのままのっかって報告したのである。

続く加藤[24]の報告もまたでたらめなものであった。彼の報告によれば、日本には「労働者」（Rodoshi）という革命的なアナルコ・サンジカリストの組合があり、そのメンバーは一、五〇〇名で、拠点は東京と大阪と Acuso[25] にあり、その影響力は大変強いというのである。これは小山弘健氏が言うように、前年四月に吉田一が高尾平兵衛、岩佐作太郎らと始めた『労働者』という雑誌を材料にして適当にでっち上げた誇大報告であった。さすがこの加藤の報告に対しては、サファロフが「私は、あまりにバラ色に絵を描き、日本の労働大衆は十分に目覚めていると言った同志加藤には同意し

ない[26]」と反対したほどである。

次にサファロフの報告「民族・植民地問題とそれに対する共産主義者の態度」であるが、サファロフはジノヴィエフと基本的に同じ立場から日本について言及しているので、ここであらためてとりあげる必要もない。その後サファロフの報告をめぐって討論が展開され、日本代表団からは長野（永野?）とヤコヴァ（yakova）[27]と加藤とが討論に加わったが、その討論の中で加藤が「我々、日本の労働者は社会革命とプロレタリア独裁の必要を認ねばならない。革命は理屈ではなく、実践であり行動である。だから共産主義革命を達成するためには、我々は力、物理的力、暴力を使わねばならない[28]」として、暴力革命を唱えていることが注目される。

以上述べてきたようなコミンテルンの報告、各国の報告、討論等の後、第一一会議において決議が採択された。日本問題は、その決議のV全体を占めているが、その全文を次に引用しよう。

「極東における日本帝国主義の略奪的政策は、日本の労働大衆の利益とは和解しがたく矛盾している。軍部、元老、財閥の支配層は朝鮮、中国、モンゴルを奴隷化するためだけでなく、日本の労働者や農民を抑圧するためにもそれを利用している。戦時中の日本の資本主義の急速な発展は、好都合な戦争状態が消えてしまうやいなや、鋭い恐慌になった。日本の資本主義は、これ以上の併合主義政策によっては、この危機を緩和することはできない。すべての権利を奪われた日本の労働者階級や農民は、帝国主義支配の打倒のみが、自分たちを貧困や奴隷の状態から抜け出させることができるということを、もっとはっきりと分かりはじめた。日本のプロレタリアートは、敵が自分たちの国の中にいることをよく知っている独立した革命勢力となっている。国際プロレタリアートの義務は、日本の労働者に、彼らが中国や朝鮮の解放のための闘いを彼ら自身の仕事と考えるように要求する。

ワシントン会議は、極東での新しい帝国主義戦争を一時的に延期したにすぎない。もし日本の勤労大衆が、支配階級

の餌食になりたくなかったら、そして太平洋での一九一四―一八年の血なまぐさい戦争のくりかえしから自分たちを救おうとするのなら、彼らは階級の敵に対して団結してあたらねばならない。日本の予算の四八・七％は、軍事費に使われている。日本の労働者階級は、他のどの資本主義諸国の労働者よりもおそろしい状態の中で暮している。支配者階級のテロ行為は、労働者階級のいかなる活動をも、残忍に抑圧する。日本農民の七〇％は、地主や資本家にとって、半労働者階級である。日本の帝国主義者は、日本列島の人口過剰によって彼らの併合政策を正当化しようと、偽善的に努めている。実際は外国の強奪は、日本の勤労大衆の状態をいっそう悪くしているだけだ。他の人民を抑圧している人民は、自由であることはできない。日本帝国主義の剣は、日本のプロレタリアート自身によって、打ち砕かれなければならない。[29]」

これまで述べてきたことから、極東勤労者大会において日本問題がどのように位置づけられたかが、明らかになる。極東において日本が占める位置は、前に引用した言葉や、「日本抜きでは議論にならない。日本のプロレタリアートは極東問題解決の鍵をその手に握っている[30]」とか、「日本でのプロレタリア運動なくしては、極東の国々は、どこもその解放をなしとげることはできない[31]」という言葉が示すように、決定的な重要性をもつものであった。

ところでこのような日本問題の評価は正しかったであろうか。その後の歴史の推移を知っている我々には、その答は明らかである。極東問題解決の鍵は、帝国主義国日本が握ったのではなく、植民地の中国が握ったのであった。それでは、どうしてこういうことになったのであろうか。それは理論的には、植民地の民族的解放も本国労働者の階級的解放＝プロレタリア革命と関連して初めて可能だとして、植民地の民族解放運動を本国のプロレタリア運動に従属させる考え方の影響であった。先進の西ヨーロッパ諸国ではなく、後進の東ヨーロッパの辺境・ロシアで初めてプロレタリア革命を成功させたソヴィエト共産党の理論家たちも、自らの経験をまだ十分理論化することには成功しておらず、まして

帝国主義国よりも、矛盾が蓄積されたその植民地から革命が起こるというふうには予測できなかったものと思われる。このようなことを考える時、日本を重視するあまり中国を軽視してはならないとした中国国民党代表の警告[32]は印象的である。

四

いろいろな問題をはらみながらも、極東勤労者大会は、二月二日のペテログラードにおける第一二会議でもってその幕を閉じた。閉会後日本代表団は、モスクワの東洋労働者共産主義大学に残った和田軌一郎を除いて、一九二二年五月から六月にかけて続々帰国した。帰国の旅も入露の時と同様困難で危険なものであったことは、故徳田球一氏や渡辺春男氏の思い出に詳しい。代表団のうち徳田と高瀬は、帰国するやただちに堺、山川らに正式の共産党をつくり、きたるべきコミンテルン第四回大会において承認を受けるべきだと主張した。その結果、一日も早く共産党を結成せよという日本内地の動きともあいまって、日本共産党は一九二二年七月、即成でつくられた。それはあまりに即成だったので「同時に帰国した代表団の大半がこれを知らないありさま」で、「高瀬・徳田の一部だけで旧グループ委員会の再編という形ですすめられたため、内地からのアナキストの人々は仕方ないとしても、一しょに帰国した片山派の人々までほとんど排除されるか後に知らされるかする状態であった[33]」このような日本共産党の結成の仕方は、「さながら前年来のモスクワにおける日本共産党実在説に、あとから日本での事実をつくってあわせていくかのような[34]」逆転した形と評されても、やむを得ないものであった。

その後の経過は、多くの研究者によって明らかにされているところであるので、これ以上は論及しないが、いずれにしろ極東勤労者大会は、わが国の共産主義運動に極めて大きい影響を及ぼしたのであって、日本の共産主義運動の功罪を論じるには、必ずこの極東勤労者大会まで遡らざるをえないのである。

(1) 渡辺春男『日本マルクス主義運動の黎明』（一九五七年、青木書店刊）一五三―五四ページ。ただし渡辺氏は別の著者『片山潜と共に』（一九五五年、和光社刊）で、「この大会は……同年十一月開催の予定を翌年一月まで延期され、場所もイルクーツクからモスコーに変更、大会の名称も『極東民族大会』と改められた」（七三ページ）と述べて、大会の名称が正式に改められたとしているのは、記憶違いであろう。

(2) 議事録の中でも、「帝国主義的な世界の強盗の種々の会議や協議会に対する対抗物と呼ばれている我々の大会は、ワシントン会議と同時期に開かれるはずであった」（一七五ページ）と述べられている。

(3) 山極晃「極東民族大会について(一)」『横浜市立大学論叢・人文科学系列第十七巻第二・三合併号』二二ページ

(4) 渡辺『片山潜と共に』七三ページ。

(5) 吉原太郎は、I・W・Wのヘイウッドの信頼厚い部下で、ヘイウッドと共に入露し、コミンテルン第三回大会と赤色労働組合インターナショナル（プロフィンテルン）創立大会には田口と共に出席している。その後、彼は任務を帯びて、日本へ帰国していた。

(6) 日本の代表加藤（吉田一）は、大会報告の中で、「私は今や共産主義者であることを宣言する。私は『無政府』という言葉を放棄して『共産主義者』という言葉だけを残す。」(Proceedings, p. 139) と述べ、サファロフもその報告「民族・植民地問題とそれに対する共産主義者の態度」の中で、「ここへやってきたこれらの同志は、最初無政府共産主義者とかサンジカリストとか称していた。我々との多くの討論の後、彼らがロシア革命の意味を了解し、国際的な革命運動を理解した後には、彼らは、自らがプロレタリア革命の信奉者であり、共産主義者であるという結論に達した」(Ibid. pp. 170～71) と述べていることからみても、張の見通しはある程度正しかったと言える。

(7) 近藤栄蔵『コミンテルンの密使』（一八四九年、文化評論社刊）一六八ページ。

(8) 渡辺春男氏は「本会議は式のようなもので、一日だけでおわり、具体的な問題はすべて本会議後につづく各国べつの分科会の討議に委ねられた」（小山弘健『革命運動の虚像と実像』三三三ページ）としているが、議事録からみる限り一二回の会議はすべて本会議であって、渡辺氏の記憶違いとしか思われない。ただし「コミンターン本部でひらかれた本会議は、ただ一日だけ」（同書三三一ページ）であったかも分らない。しかしその後の会議も、すべて本会議であって、その本会議とは別に、各国別の会議があったことが、議事録に明らかである。

(9) Proceedings, p. 5

(10) Ibid. p. 30
(11) Ibid. p. 33
(12) Ibid. p. 34
(13) (14) (15) (16) Ibid. p. 33
(17) 片山は本来主催者側のコミンテルンに属するが、彼が報告をするに至った理由を、彼自身「日本の報告は悪い条件のもとにある。なぜなら、代表団は直接日本からやってきており、たいてい労働者で、彼らは英語で完全な報告はできないからであり、そして不運なことには、日本部門の書記（田口と思われる…辻野）が病に倒れ、今、入院中であるからだ。その上同志クキ（kuki）が誰を指すのか未だ明らかではない…辻野）も病気であり、そこで私が諸君に簡単な報告をせねばならなくなったのだ」（proceedings, p. 121）と述べている。
(18) (24) ヤキワは高瀬清で、加藤が吉田一であることにほぼ間違いない。なおドイツ語版大会報告書ではヤキワではなく、タハワ（Tahawa）となっている。
(19) Proceedings, p. 136
(20) (21) Ibid. p. 137
(22) 『現代史資料・社会主義運動㈠』（一九六四年、みすず書房刊）二〇ページ
(23) 同右五〇ページ
(25) 山辺健太郎氏はこの Acuso と Ukasa にあたるドイツ語版大会報告書の中の Okso と Uhusa を、共に九州と訳しているが、これを九州と訳せる根拠はどこにもない。ドイツ語版大会報告書の中では、九州は kiusiu として出ているのである。
(26) Proceedings, p. 190
(27) ヤコヴァはヤキワと同一人物らしく、Proceedings の索引でヤコヴァの項をみると「ヤキワ参照」となっている。
(28) Proceedings, p. 190
(29) Ibid. pp. 213—14
(30) Ibid. p. 32
(31) Ibid. p. 197
(32) Ibid. p. 183

(33) 渡辺春男『日本マルクス主義運動の黎明』一八五ページ。
(34) 岸本英太郎・渡辺春男・小山弘健『片山潜』第二部（一九六〇年、未来社刊）二五一ページ。

あとがき

極東勤労者大会は、大会議事録あるいは大会報告書の入手がなかなか困難であったため、いままで日本の共産主義運動史研究の上で、ひとつの盲点をなしており、そのため雑誌『思想』誌上で、小山弘健氏と山辺健太郎氏との間に論争が展開されたものの、あまり成果を実らせなかったことは周知のとおりである。もちろん近年大会参加者の一人、渡辺春男氏の回想記『片山潜と共に』が刊行されてから、それをもとにした小山弘健氏の業績（『片山潜』第二部）も発表され、大会のおおよその輪郭も分かりかけてきたが、しかしいまだ隔靴掻痒の感を免れなかった。そのような時、二年間ユーゴスラヴィヤに留学していた畏友高屋定国氏が、ベオグラードの国際労働運動研究所図書室で大会議事録を発見し、研究所員の好意によりそれをマイクロ・フィルムに写してもって帰ってきた。

目下筆者はその大会議事録を翻訳中で近く刊行の予定であるが、本稿は翻訳中の大会議事録をもとに、日本問題を中心にして大会の概略を述べたものである。本稿執筆に際しては京都大学人文科学研究所の松尾尊兊氏からドイツ語版大会報告書を貸与していただき、小山弘健氏および『横浜市立大学論叢』に「極東民族大会について(一)」を発表されて大会の全貌を詳しく紹介されつつある山極晃氏から、色々の御教示をいただいた。記して深く感謝するしだいである。